東洋文庫所蔵本に押捺された蔵書印について（二十）

―東洋文庫関係の蔵書印―

中善寺　慎

既刊連載目次

一　朝鮮本に押捺された朝鮮の蔵書家の蔵書印　書報35号
二　僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（上）　書報36号
三　僧侶・寺院の蔵書印、附神官・神社の蔵書印（下）　書報37号
四　国学者の蔵書印（上）　書報38号
五　国学者の蔵書印（下）　書報39号
六　漢学者・漢詩人の蔵書印　書報40号
七　学校・教育機関の蔵書印　書報41号
八　医家・本草家の蔵書印　書報42号

九　大名・藩主とその家の蔵書印　書報43号
十　幕臣・藩士の蔵書印　書報44号
十一　戯作者・操觚者・新聞社の蔵書印　書報45号
十二　商賈・実業家・企業の蔵書印　書報46号
十三　近代の学者・教授の蔵書印　書報47号
十四　図書館・博物館とその周辺の蔵書印　書報48号
十五　政治家・官僚の蔵書印　書報49号
十六　欧米人の蔵書印　書報50号
十七　歌人・俳人・詩人の蔵書印　書報51号
十八　植物学者の蔵書印　書報52号
十九　公家・華族の蔵書印　書報53号

凡　例

・印影は縮尺任意の単色写真である。

・印文の縦の寸法をミリメートルの数字で掲げた。

・複数の資料に該当蔵書印を見い出せるものは、印影を採集した資料名に＊印を付した。

・資料名につづけて、請求記号を丸括弧に包んで付した。

・蔵書家の伝記などは主として次の資料に依った。

平凡社編『日本人名大事典』

榎一雄『東洋文庫の六十年』

東洋文庫編『東洋文庫年報』

東洋文庫編『東洋文庫八十年史』

・配列は、印記所有者のよみの五十音順とした。

市古宙三（一九一三―二〇一四）

昭和・平成期の中国史学者。大正二年（一九一三）市古由太郎・なつの三男として山梨県甲府市に生まれる。兄に国文学者市古貞次（一九一一―二〇〇四）がいる。府立第六中学校、浦和高等学校を経て、東京帝国大学文学部東洋史学科に進み、昭和十七年（一九四二）同大学院を修了。東亜研究所員、中央大学教授を経て、昭和二十六年お茶の水女子大学助教授となり、三十二年教授、五十一年学長。のち中央大学教授。東洋文庫の近代中国研究委員会の運営委員として中国近現代史関係の資料収集と整理に努める。著作に『近代中国の政治と社会』『中国の革命』などがある。

掲出書はすべて近代中国研究委員会所蔵資料。

「市古蔵書」（18）　『China : the pity of it』（六〇一六）
『In forbidden China』（六一〇八）
＊『Tibet and Turkestan』（六一九四）
「市古図書」（46）　『最新支那要人伝』（J―五七）

岩井大慧（一八九一―一九七一）

大正・昭和期の東洋史学者。明治二十四年（一八九一）東京市芝区に生まれる。本姓高木。旧姓圀下。曹洞宗立第二中学林、早稲田中学、第一高等学校を経て、大正七年（一九一八）東京帝国大学文科大学史学科を卒業、同大学院に進む。在学中からモリソン文庫の整理業務に携わり、大正十三年東洋文庫の副主事となる。大正大学講師、東洋大学教授を経て、昭和二十年（一九四五）駒沢大学文学部教授。昭和三十二年文学博士。昭和十四年からは東洋文庫主事を務め、東洋学関係文献の拡充に努めた。昭和二十三年国立国会図書館支部東洋文庫長となる。昭和四十年に、蒐集の日本刊行東洋史関係書六一〇冊を受贈。「岩井大慧氏寄贈書」が『新着図書目録一四号』に収載される。昭和四十六年（一九七一）没。著書に『日支仏教史論攷』などがある。駒沢大学図書館にも旧蔵書千七百余冊が収蔵されている。

「岩井」（11）　『倭語類解』（Ⅶ―一―八一三）　ほか
「岩井（小）」（9）　『北平の薩満教に就て』（Ⅳ―六―一*）　ほか
「圀下」（12）　『敦煌石室の遺書』（X―六―抜―四〇）　ほか
「知足」（12）　『清朝に於ける在支欧人と朝鮮使臣』（X―六―抜―一六）　ほか
「知足艸堂蔵書」（40）　『康熙帝傳』（X―六―B―一五―一七）　ほか
「知足草堂蔵書」（41）
『江戸時代書誌学者自筆本展覧会目録』（Ⅱ―展―四三）　ほか

上田万年（一八六七―一九三七）

明治から昭和にかけての国語学者。慶応三年（一八六七）江戸大久保百人町の名古屋藩下屋敷に上田虎之丞・いね子の長男として生まれる。幼名は鉚太郎。明治二十一年（一八八八）帝国大学文科大学和文学科を卒業。同大学院に進み、B・H・チャンバレン（一八五〇―一九三五）に師事、言語学の手ほどきを受けた。ドイツ・フランスに留学ののち、明治二十七年に帝国大学教授となり博言学講座を担当する。明治三十二年文学博士。東京帝国大学文科大学長、神宮皇学館長、国学院大学長などを歴任した。日本言語学の開拓者であり、門下から優秀な言語学者を輩出した。大正十三年（一九二四）財団法人東洋文庫設立に伴い理事に就任。昭和十二年（一九三七）腸疾患のため東京小石川駕籠町の自宅に没す。墓は東京南青山の竜泉寺と谷中墓地にある。主著『国語のため』など。東洋文庫には遺愛の書百数十冊があり、『東洋文庫十五年史』に「上田万年氏図書目録」を収載。旧蔵の国語学関係文献七千余冊を収めた上田文庫が日本大学図書館にある。

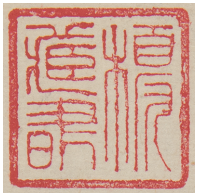
掲出印はチェンバレン著『古事記』より採取。自らを「まんねん」と称していたものか。

「Ueda Mannen Tokyo Japan」(31)

『Wanderungen durch die Mongolei nach Thibet zur Hauptstadt des Tale Lama』(Ⅶ―一―一五二)

『Aus Aegyptens Vorzeit』(XVI―一―G―c―一―九)

＊『"Ko-ji-ki"(古事記), or, "Records of ancient matters"』(XVII―七―B―一八)



榎一雄（一九一三―一九八九）

昭和期の東洋史学者。大正二年（一九一三）兵庫県明石郡垂水村に榎栄三郎・芳乃の長男として生まれる。横浜第三中学、第一高等学校を経て、昭和十二年（一九三七）東京帝国大学文学部東洋史学科を卒業。白鳥庫吉（一八六五―一九四二）に師事。第一高等学校教授を経て、昭和三十年東京大学教授。昭和三十七年文学博士。東洋文庫の研究部長・図書部長・専務理事を歴任。昭和四十九年国立国会図書館支部東洋文庫理事長。資料の充実に努め、敦煌文献、中近東現地語資料、ポルトガルのアジュールダ宮図書館所蔵イエズス会東アジア関係文書、G・E・モリソンの故郷シドニーの図書館所蔵モリソン関係資料など、戦後の東洋文庫の特色ある収集のほとんどを手掛けた。平成元年（一九八九）没。『榎一雄著作集』に主要な論著を収録。約三万冊の旧蔵書は東洋文庫に現蔵、『榎一雄文庫目録』が刊行されている。

掲出印四種の使い分けについては不明である。ただし、「榎蔵書（小）」印のみ没後の押捺ではないかと推測する。受贈時点で蔵書印の捺されていない資料に対し補足的に押捺したものと見て取れる。

「榎（丸印）」（10）

＊『欧人の支那研究』（E―二二二―イシ○一―○○一）

『五経』（E―I―一―A―一○○一）

『元明清史略』（E―二二一・○五七―イシ○一―○○一）

「榎一雄」（14）

＊『洛陽伽藍記』（E―II―一一―F―○○○五）

『殊域周咨録』（E―II―一一―O―○○一四）

『京都神田氏寄託書展観目録』（E―○二七・七―トウ○一―○○一）

『元典章校補釈例』（E―二二一・二二―チン○一―○○二）

「榎蔵書」（24）

『聖武記』（E―II―三―○○一○）

「榎蔵書（小）」（18）

『名物六帖』（E―○三一・二―イト○一―○○二）ほか

小田切万寿之助（一八六八―一九三四）

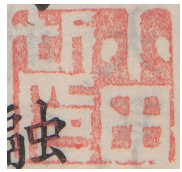
明治・大正期の外交官・銀行家。慶応四年（一八六八）米沢藩の儒者小田切盛徳の長男に生まれる。字は富卿。号は銀台。田盛大とも称す。興亜会支那語学校、斯文学会、東京外国語学校で修業後、明治十七年（一八八四）外務省留学生となり中国に渡る。明治二十年仁川領事館書記生。京城、桑港、紐育に在勤の後、領事に任ぜられる。明治三十五年上海総領事。明治三十八年外務省を辞職して横浜正金銀行顧問。翌年に同行取締役となり、上海・北京間を往来して借款事業に尽力した。大正六年（一九一七）岩崎久弥（一八六五―一九五五）の代理としてモリソン文庫の購入にあたる。大正十三年の財団法人東洋文庫設立に伴い初代監事に就任。昭和九年（一九三四）死去。著書に『朝鮮』、漢詩文集に『銀台遺稿』がある。昭和十一年受贈の旧蔵書約二万冊は、漢籍集部に関してほとんど完璧に等しい蒐集と言われる。『小田切文庫目録』にその概要を確認できる。

掲出印のうちで主たる蔵書印は、「仰天楼主人」（書頭）、「小田切万寿之助印」（冊頭）、「小田切富卿」（冊頭）、「富卿（大）」（冊頭）である。「寿之印」は帙の題簽に多く捺されている。

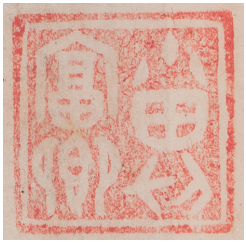
掲出書『従征日記』の冊頭には、小田切盛徳画「魯西亜国使節布恬廷肖像」一葉がある。

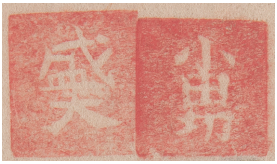
「騎虎猛士」（32）　『艮斎文略』（Ⅶ―四―B―四八）ほか

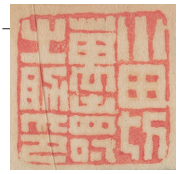
「仰天楼主人」（26）　『春秋正義』（Ⅰ―六―B―八〇三）ほか



「銀台」（32）　『藜照楼明二十四家詩定』（Ⅳ－一－一一九）
＊『明詩百三十名家集鈔』（Ⅳ－一－一三六）
「寿之印」（8）
『明詩百三十名家集鈔』（Ⅳ－一－一三六）ほか
「小田切」（15）　『忠経補注』（Ⅴ－九－E－a－一〇）
「小田切（丸印）」（10）
『今書』（Ⅻ－三－D－a－一〇〇一）ほか
「小田切（丸小）」（7）
『扶桑皇統記図会』（Ⅹ－五－B－一〇〇八）
「小田切（楕円）」（14）　『詩韻精英』（Ⅶ－四－D－一〇）
＊『従征日記』（Ⅹ－五－I－一〇〇一）
「小田切（長方）」（25）　『日本略史』（Ⅹ－五－B－一〇〇七）
「小田切印」（21）　『忠経補注』（Ⅴ－九－E－a－一〇）
「小田切印（丸印）」（13）
『増補注解詩韻含英』（Ⅶ－四－D－一三）
「小田切印（小）」（13）　『山陽文稿』（Ⅶ－四－B－一一）
＊『松嶠文鈔』（Ⅶ－四－B－二五）
「小田切氏」（21）　＊『佩文斎詠物詩選』（Ⅳ－一－八一七*）
『老子解』（Ⅴ－九－E－b－一〇〇一）
『近古史談』（Ⅹ－五－E－一〇〇一）
「小田切氏（小）」（12）　『拙堂文話』（Ⅶ－四－D－九）ほか
「小田切盛大」（22）　『日本略史』（Ⅹ－五－B－一〇〇七）
「小田切／盛大」（18＋19）
『日本略史』（Ⅹ－五－B－一〇〇七）







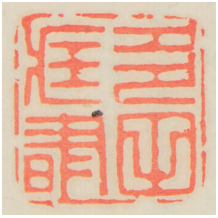
「小田切盛大之印」（18）
＊『稿本国史眼』（X－五－B－一〇〇三）
『当五銭低落管見』（XIII－五－K－a－四）
「小田切万寿之助印」（20）
『詩韻精英』（VII－四－D－一〇）ほか
「小田切富卿」（29）
『春秋正義』（I－六－B－八〇三）ほか
『忠経補注』（V－九－E－a－一〇）
「盛業」（21）
『詩学便覧』（VII－四－D－五）
「盛大之印」（30）
『春秋正義』（I－六－B－八〇三）ほか
「田盛大印」（24）
『放翁先生詩鈔』（IV－二－C－八一六）
「田盛大号騎虎」（31）
『明詩百三十名家集鈔』（IV－一－一三六）ほか
「富卿（極小）」（8）
『松嶠文鈔』（VII－四－B－二五）ほか
「富卿（小）」（13）
『元詩自攜』（IV－一－二二）
「富卿（楕円）」（22）
『金詩選』（IV－一－二一）
「富卿（大）」（24）
＊『明人詩鈔』（IV－一－一一六）
『明詩選』（IV－一－一三五）
「富卿経眼」（16）
『日本略史』（X－五－B－一〇〇七）
『明人詩鈔』（IV－一－一一六）ほか
「マス」（7）
『弁妄』（IV－五－七）
「冷香亭主」（14）
『漫遊文草』（XI－五－A－五）
「□曰富卿」（20）
＊『艮斎文略』（VII－四－B－四八）

北村甫（一九二三–二〇〇三）

昭和・平成期の言語学者。静岡高等学校を経て昭和二十三年（一九四八）東京大学文学部言語学科を卒業。多田等観（一八九〇–一九六七）筆頭の教え子。二松学舎専門学校予科教授、国立国語研究所員、東京大学助手を経て、昭和三十三年東洋文庫研究員となり、蔵和辞典編纂委員会の研究事業を担当した。昭和三十六年にロックフェラー財団の支援を受けて東洋文庫にチベット研究室が設置されると、その運営の中心的役割を果たした。昭和三十九年から東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教となり、昭和四十二年同研究所教授、昭和四十九年には同研究所所長。日本におけるチベット学研究を牽引した。平成二年（一九九〇）東洋文庫理事長に就任。編著書に『現代チベット語分類辞典』等がある。平成十五年（二〇〇三）胸膜炎のため逝去。生前に東洋文庫は中央アジア・チベット関係資料を受贈している。『東洋文庫年報』に拠ると平成十三年（二〇〇一）から複数年にわたり、合算すると千三百冊ほどの数量となるが詳細は不明。この中には多田等観旧蔵書も少なからず含まれている。

掲出印は地小口に捺されていたものである。

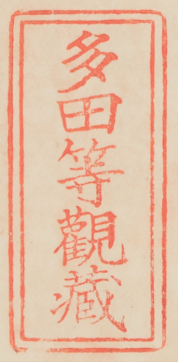
「北村」（14）　『チベットの民族と文化』（Ⅱ–六–一六五）



多田等観（一八九〇―一九六七）

大正・昭和期の仏教学者。明治二十三年（一八九〇）多田義観・タエの三男として秋田郡土崎港旭町の浄土真宗本願寺派西船寺に生まれる。秋田中学を卒業後、明治四十三年に本願寺に入る。大正二年（一九一三）ブータンを経て入蔵を果たし、拉薩北郊のセラ寺に起居してラマ教の教義の研究に専心した。この間、直接具足戒を授けられるなどダライ・ラマ十三世（一八七六―一九三三）の信任が厚く、大正十三年多くの仏教文献と稀覯書を携えて帰国する。大正十五年に山田菊枝（一八九八―一九九二）と結婚。東北帝国大学講師、東京帝国大学講師、アメリカ・アジア研究所教授などを歴任。昭和三十年（一九五五）学士院賞。『西蔵大蔵経総目録』『西蔵撰述仏典目録』の編纂にたずさわり，日本のチベット学発展の基礎を作った。昭和三十一年より東洋文庫研究員。晩年は東洋文庫チベット研究室で後進の育成に努める。昭和四十二年（一九六七）死去。著書に『チベット』等がある。将来した大蔵経は竜谷・東京・東北などの各大学に，蔵外文献は東北・東京大学に所蔵された。東洋文庫には旧蔵書若干のほかインド刊行チベット語洋装本や仏画（タンカ）類を収蔵する。

山田菊枝は島地黙雷（一八三八―一九一一）創立の千代田高等女学校の出身。掲出書『西蔵小志』に「島地文庫」印も捺されてあるのは、この縁か。



「西船寺蔵書」（44）　『和漢年契』（X－一－一〇〇三＊）
「多田」（11）　『西蔵仏教及び英蔵関係』（Ⅱ－六－一六六）
「多田（大）」（12）　『十万白竜』（Ⅶ－五－六四）
「多田（丸）」（10）　『大正新修大蔵経総目録』（Ⅳ－四－B－五）
「多田蔵書」（25）一致　『大正新修大蔵経総目録』（Ⅳ－四－B－五）ほか
「多田等観」（37）　＊『大正新修大蔵経総目録』（Ⅳ－四－B－五＊）
『西蔵小志』（Ⅺ－六－E－三二）ほか
「多田等観蔵」（45）　『柳氏諺文志』（Ⅰ－九－B－一〇一）
＊『蔵文和訳大日経』（Ⅳ－四－E－一一〇）
「多田等観蔵書」（28）　＊『密教研究』（JⅣ－四七）ほか

（国立国会図書館司書）